



随想

立子とリヤカー

高橋 龍 蔵

(羽後町立図書館勤務)

女流三丁の一人俳人星野立子が、ここ西馬音内を訪れたのは終戦のほとぼりも覚めやらぬ昭和二十五年五月五日のことである。

立子は人も知るごとく高浜虚子の次女であり、大正十五年ごろより作句をはじめ「ホトトギス婦人句会」において、みどり女、あふひ久女らとともに妍を競った人物である。昭和五年六月、女流俳誌『玉藻』を創立主宰し来町当時は五十歳、主宰誌の誌齢も二十年を経て作家として脂ののりきった時期であった。

立子をこのように辺びな土地へ、しかもいまとは違い交通事情の悪かった時代に呼べたのは、なんといっても地元の故柴田果(俳号・紫陽花)氏の力によるものである。そしてまた立子がこの招きにこたえたのは、戦中、雑誌が停頓勝ちであったのを盛り上げるべく、誌友拡張のふくみもあつたであろうかと察しられる。

二十年以上も経ったいま資料も乏しく、また果氏も亡くなられたので当時の事情がはっきりしないが、立子の西馬音内滞在は二泊三

日に及んでいる。二十五年七月号の『玉藻』にこの印象記を「西馬音内」という題で散文詩のような形で二ページにわたって載せている。これによると鎌倉から直行し湯沢駅下車、この三月廃止になった雄勝線の電車でガットンゴットンゆられて西馬音内に入ったようだ。

その当日は宿泊するS家で正午までからだを休めて疲れをとり、午後から、S家の経営する林檎園へ、遅い羽後路の春も終わろうとする野面を眺めながらの散策に、果氏をはじめ土地の俳人らと出かけた。

林檎園は梨の花が散りはじめ、林檎の花が真盛りで、日当りの良い傾斜面には土筆、蕨もでて、同行の姪の今井千鶴子とそれを摘み興じていたことが、私も参加したので記憶に残っている。そしてこの林檎園の山荘で土地の俳人十九人による歓迎小句会にでている。

立子のこのときの句に

木瓜朱し真赤なほけと感嘆す

春日傘言はるるままに歩きけり

がある。

とくに後の句は、俳句がまだ駆け出しであった私にとっても婦人に似あわぬ大胆な作のように思われて印象深かった。立子のこのような句風を父親の虚子は

「自然の姿をやわらかい心持で受取ったままに詠詠するということは立子の句に接してはじめてこれあるかなという感じがした。写生という道をたどってきた私は、さらに写生の道を立子の句から教わったと感ずることもあつたのである」といっている。

さてこのように来町第一日目を終えた立子は、翌六日は果氏の別荘元西の杉松軒で開かれた全県俳句大会に、西馬音内から会場地までの二キロ余の道を土地の俳人たちと歩いて臨んでいる。

会場の杉松軒は果氏が戦中その財力をつくして建て直させたもので、かつて昭和六年には「俳星」の全県俳句大会も行なわれた場所でもあり、庭もぜいを凝らし、竹林が美しく付近では小規模ながら名園として名高い。

前日に引き続きこの日も、晴天で、会する者七十名余、遠く秋田市、近隣では増田、横手などからも多くの俳人が参加している。庭には雪柳が咲き、古木のどうだんの前に立った立子は

どうだんの花虻おとすまたおとす

の句を得て、心ゆくまで羽後路の風物を楽しみ、主宰誌の誌友らと語らい上上で大会を終っている。

この句会の模様は余り記憶が定かでないが姪の千鶴子の披講がきれいであつたことが印象に鮮かだ。そして帰りはS家の女主人とり